

看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報)

—基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因—

遠藤 恵子・松永 保子・遠藤 芳子・佐藤 幸子
井上 京子・三澤 寿美・藤田 あけみ・佐竹 真次

Studies on the Self-Efficacy of Nursing Students in a College (1st Report)

Transition of Self-Efficacy and its Influential Factors at Practice of Basic Nursing Technology

Keiko ENDO, Yasuko MATSUNAGA, Yoshiko ENDO, Yukiko SATO,
Kyoko INOUE, Sumi MISAWA, Akemi FUJITA, Shinji SATAKE

Abstract : The purpose of this paper is the transition of self-efficacy of eighty nursing students before and after the practice of basic nursing technology (measurement of blood pressure) and the influential factors on self-efficacy on the basis of Bandura's concept. While self-efficacy was measured by the Self-Efficacy Scale, the influential factors on self-efficacy was measured by the Self-Efficacy Stimulative Scale and Objective Valuation of Technology Scale.

Self-efficacy after the practice was higher than before. The transition of self-efficacy was associated with enactive attainment or physiological and affective states, but not with verbal persuasion or objective valuation of technology.

The findings suggest that the approaches which the students acquire the attainment and positive feeling may enhance their self-efficacy.

Key words : self-efficacy, nursing education, nursing student, practice of basic nursing technology, measurement of blood pressure

はじめに

平成6年12月にとりまとめられた「少子・高齢化社会看護問題検討会」報告書¹⁾は、高齢化、少子化、医療の専門高度化という看護をめぐる状況の変化に対応するには、看護職員の資質の向上が重要で、そのための具体策として充実した看護基礎教育が必要であると示した。この報告書を受け、

平成8年8月保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部が改正された。この改正の趣旨の中で、教育機関は、学生の自己学習能力を高める教育方法の工夫と、独自性のある教育の実施を求められた²⁾。

本学は、教育目標の一つに「進んで自ら学ぶ精神と態度」を掲げている。資質の高い人材の養成には、学生本人の進んで自ら学ぶ精神と態度、つまり学習意欲が不可欠である。これは、学生だけの問題ではない。教員は、これまでのような一方的な知識の提供でなく、学生の学習意欲を高める教育方法を開発する必要がある。

山形県立保健医療短期大学
山形市上柳 260 番地
Yamagata School of Health Science
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, 990-2212 Japan

Bandura は、「自己効力感とは、積極的に課題に取り組むというような認識を意図的に働かせることであり、この自己効力感が行動の開発や学習への自信や意欲を促す³⁾」と述べ、ある特定の課題の解決に重要な意味をもつものとして、自己効力感を提唱した。自己効力感とは、ある行動を確実に遂行し、望ましい結果を得ようとする信念であり、ある行動の先行要因としてその行動の遂行を促進・抑制し、将来の行動の改善を予測する重要な因子となる⁴⁾。また Bandura は、自己効力感とは自然発生的に生じるものではなく、個人が自ら作り出していくもので、それは、4つの情報により生み出されると述べている⁵⁾。この4つの情報とは、自分で行動し達成できたという成功体験の累積である「遂行行動の達成」、自分と同じ状況で同じ目標を持っている人の成功体験や問題解決方法を学ぶ「代理的経験」、専門性に優れた人から励まされたりきちんと評価してもらうという「言語的説得」、課題を遂行したときの生理的・心理的な良好の反応

の自覚である「生理的情動的状態」である。そしてこの4つの情報を巧みに組み合わせることにより、自己効力感が高まる。さらに、Bandura は認知された自己効力感をあらかじめ測定しておくことにより、さまざまな種類の行動変化の程度を予測することができる⁶⁾と述べている。

自己効力感に関する研究は、これまで教育の場、或いは臨床心理学の分野において行われ、自己効力感が低いと無気力、無関心、劣等感、抑うつ状態等がみられることが報告されている⁷⁾。また近年、看護学の分野においても自己効力感が注目され、自己効力感とは保健行動に強く影響していることが明らかとなっている⁸⁾⁹⁾。

以上のことより、自己効力感に着目した教育方法の開発は、近年の急激な社会変化の中で、質の高い看護職を養成する看護教育に重要な意味をもつと考えられる。しかし、これまで看護学生の自己効力感について明らかにした研究はほとんどない。

資料 1 自己効力感尺度

学籍番号 _____ 実施年月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日()

つぎの質問に答えてください。質問は、全部で23問あります。右の応答欄の中から、あてはまる場合には『Yes』、あてはまらない場合には『No』を○で囲んでください。Yes, No どちらにもあてはまらないと思われる場合でも、より自分に近いと思う方に必ず○をつけてください。この調査は成績などとは関係なく、どちらが正しい答えということでもありません。あまり深く考えずにありのまま答えてください。

- | | | |
|---|-----|----|
| 1) 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある。 | Yes | No |
| 2) しなければならないことがあっても、なかなか取りかからない。 | Yes | No |
| 3) 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける。 | Yes | No |
| 4) 新しい友達を作るのがにがてだ。 | Yes | No |
| 5) 重要な目標を決めても、めったに成功しない。 | Yes | No |
| 6) 何かを終える前にあきらめてしまう。 | Yes | No |
| 7) 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人の所へ行く。 | Yes | No |
| 8) 困難に出会うのを避ける。 | Yes | No |
| 5) 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない。 | Yes | No |
| 6) 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう。 | Yes | No |
| 7) 面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる。 | Yes | No |
| 8) 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる。 | Yes | No |
| 9) 新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくときすぐにあきらめてしまう。 | Yes | No |
| 10) 最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする。 | Yes | No |
| 11) 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない。 | Yes | No |
| 12) 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない。 | Yes | No |
| 17) 失敗すると、一生懸命やろうと思う。 | Yes | No |
| 18) 人の集まりの中では、うまく振る舞えない。 | Yes | No |
| 19) 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる。 | Yes | No |
| 20) 人に頼らない方だ。 | Yes | No |
| 21) 私は自分から友達を作るのがうまい。 | Yes | No |
| 22) すぐにあきらめてしまう。 | Yes | No |
| 23) 人生でおきる問題の多くは処理できるとは思えない。 | Yes | No |

終わったら、すべての質問に○がついているかどうか確かめてください。
(成田健一ら(1995):教育心理学研究 43(3)より引用)

そこで, 本研究を, 看護学生の自己効力感を高め, ひいては学習意欲を高めるような教育方法開発の基礎研究と位置づけ, 次の3点を研究目的とした。

1. 看護学生について血圧測定演習前後の自己効力感の変化を明らかにする。
2. 演習前後の自己効力感の変化に影響する情報の特徴を明らかにする。
3. 演習前後の自己効力感の変化と看護技術の客観的評価との関連を明らかにする。

方 法

1. 対 象

短期大学看護学科1年生80名

2. 測定用具

1) 自己効力感尺度

Sherer らによる Generalized Self-Efficacy 尺度 (以下 SE 尺度) を成田らが翻訳した, 23 項目の日本語版¹⁰⁾ を使用した (資料1)。本来, 双極の5件法であるが, 演習時間内に複雑な質問紙を用いることで学生に不必要な不安・緊張を与えないこと, 回答時間をできるだけ短くし, 本来の演習時間を削減させないという教育的配慮から, 本研究では, 双極の2件法とし選択肢を簡略化した。得点の範囲は, 0 から 23 点であ

り, 得点が高いほど自己効力感強い。

2) 自己効力感促進尺度

学生本人が認識する自己効力感を促進する情報を測定するため, Bandura の自己効力感を促進する4つの情報の概念をもとに筆者が作成した。これは, 「遂行行動の達成」「言語的説得」「生理的情動の状態」という3つの情報から構成され, 各情報4項目ずつ, 合計12項目で, 各項目2件法とした (資料2)。もう1つの情報である「代理的経験」は, 自己効力感促進尺度から除外した。これは, 演習が小グループで行われ, 他者の行動を充分観察できる状況でなく, 「代理的経験」に関する信頼性のあるデータが収集できないと判断したためである。

3) 血圧測定技術の客観的評価

演習技術を客観的に評価するため, 筆者が作成した。自己効力感促進尺度の「遂行行動の達成」と同一の4項目で, 2件法とした。

3. 手 順

血圧測定演習1週間前の基礎看護技術演習の時間に, 学生80名に口頭で研究の目的を伝え, 研究への参加を依頼した。同時に研究への参加を拒否できること, この研究結果は成績には一切関係ないことを学生に伝えた。

看護技術演習を担当する8名の教員で事前に打

資料2 自己効力感促進尺度

学籍番号 _____ 実施年月日 平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日 ()

次の質問に答えてください。質問は12問あります。右の応答欄で当てはまる方に○をつけてください。この調査は成績などとは一切関係ありませんので, 自分に近いと思われる方に必ず○をつけてください。

- | | |
|---|------------|
| 1) 指が1~2本はいる程度に均等にマンシエツトを巻くことができた。 | できた・できなかった |
| 2) 聴診部位を確認し, 聴診器をマンシエツトに入れ込まないようにして上腕動脈の上に置くことができた。 | できた・できなかった |
| 3) 聴診時は, 触診法の測定値より20mmHg位上までマンシエツトを加圧することができた。 | できた・できなかった |
| 4) 一拍動一目盛り(2mmHg)の速さで排気バルブをゆるめて, 収縮期圧拡張期圧を読みとることができた。 | できた・できなかった |
| 同じグループの学生の血圧測定がうまくできた場面を見た。 | はい・いいえ |
| 同じグループの学生の血圧測定がうまくできなかった場面を見た。 | はい・いいえ |
| これまでにテレビやビデオで血圧測定をみたことがある。 | はい・いいえ |
| これまでにデモンストレーション以外に実際に血圧測定をみたことがある。 | はい・いいえ |
| 5) 今日の演習で教員にほめられた。 | はい・いいえ |
| 6) 今日の演習で教員に励まされた。 | はい・いいえ |
| 7) 今日の演習で教員がきちんと評価してくれた。 | はい・いいえ |
| 8) 今日の演習で友人にほめられた。 | はい・いいえ |
| 9) 血圧測定が楽しかった。 | はい・いいえ |
| 10) 血圧測定を経験できてうれしかった。 | はい・いいえ |
| 11) 今日の演習で緊張感があった。 | はい・いいえ |
| 12) 今日の演習で達成感があった。 | はい・いいえ |

Table 1 演習前と演習後の自己効力感得点

	平均得点	標準偏差	最大値	最小値
演習前(n=80)	5.11	1.65	9	1
演習後(n=80)	5.38	1.52	8	1

ち合わせをし、演習時の指導方法と客観的評価の基準を確認した。

演習の直前に、学生は演習前の自己効力感尺度に記入した。演習では、教員による血圧測定の実演を実施し、その後、学生は4名ずつのグループに分かれ、1名が看護師、1名が患者、2名が観察者となり順次交代した。場面は、看護師が寝衣を着てベッドに臥床した患者の血圧を測定する、と設定した。血圧測定には、リバロッチ水銀血圧計と聴診器を用いた。各グループに1名の教員を配置した。教員は、看護師役の学生が血圧測定を終了する毎に、教員間で確認した基準にそって、血圧測定技術の客観的評価を記入した。学生は、自分の一連の血圧測定手順が終了した直後、演習後の自己効力感尺度と自己効力感促進尺度に記入した。

4. 分 析

演習前と演習後の自己効力感尺度を得点化し、演習前後の得点を比較した。演習後自己効力感得点が増加した群、変化なし群、減少した群の3群に分け、自己効力感促進尺度や血圧測定技術の客観的評価との関連を統計的に分析した。分析検定には、統計ソフト HALBAU を使用した。

結 果

1. 対象属性

80名の学生に研究を依頼し、拒否する者はいなかったため研究対象は80名であった。78名が女性、2名が男性で、平均年齢は18.4歳(18~26歳)であった。

2. 演習前後の自己効力感

Table 2 遂行行動達成得点と自己効力感の変化

	遂行行動達成得点
自己効力感減 (n=9)	2.33
自己効力感不変 (n=47)	2.73
自己効力感増 (n=24)	2.83

Table 3 言語的説得得点と自己効力感の変化

	言語的説得得点
自己効力感減 (n=9)	1.79
自己効力感不変 (n=47)	2.02
自己効力感増 (n=24)	2.25

演習前後の自己効力感得点を Table 1 に示した。自己効力感得点は、演習前が平均 5.11 ± 1.65 点 (1~9点)、演習後が 5.38 ± 1.52 点 (1~8点) であった。演習前に比べ演習後自己効力感得点の減少した者は9名、変化のなかった者は47名、増加した者は24名であった (Fig. 1)。演習後の自己効力感得点の平均は、演習前に比べ有意に高かった ($p < .05$)。

3. 演習前後の自己効力感得点の変化と自己効力感促進尺度との関連

自己効力感促進尺度における、「遂行行動の達成」と演習前後の自己効力感得点の変化との関連を、Table 2 に示した。「遂行行動の達成」の得点は、演習後自己効力感得点の減少した群が平均 2.33、変化しなかった群が平均 2.73、増加した群が平均 2.83 であった。自己効力感得点の減少した群と増加した群の2群間で「遂行行動の得点」を比較すると、増加した群の方が減少した群より、有意差はないが高い傾向にあった。

「言語的説得」と演習前後の自己効力感得点の変化との関連を、Table 3 に示した。「言語的説得」の得点は、演習後自己効力感得点の減少した群が平均 1.79、変化しなかった群が平均 2.02、増加した群が平均 2.25 であり、群間で差はみられなかった。

「生理的情動的状态」と演習前後の自己効力感得

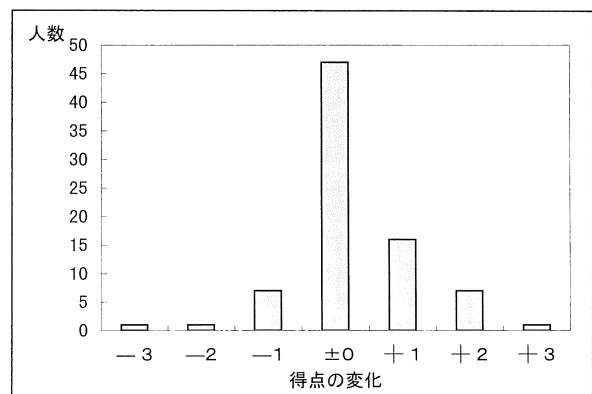


Fig. 1 演習前と演習後の自己効力感得点の変化

Table 4 情動的状態得点と自己効力感の変化

	情動的状態得点
自己効力感減 (n=9)	3.22
自己効力感不変 (n=47)	3.04
自己効力感増 (n=24)	3.46

点の変化との関連を, Table 4 に示した。「生理的情動的状態」の得点は, 演習後自己効力感得点の減少した群が平均 3.22, 変化しなかった群が平均 3.04, 増加した群が平均 3.46 であった。自己効力感得点の変化なし群と増加した群の 2 群間で、「生理的情動的状態」の得点を比較すると, 増加した群の方が変化なし群より, 有意差はないが高い傾向にあった。

4. 演習前後の自己効力感の変化と看護技術の客観的評価との関連

演習前後の自己効力感得点の変化と看護技術の客観的評価との関連を Table 5 に示した。看護技術の客観的評価は, 演習後自己効力感得点の減少した群が平均 3.00, 変化しなかった群が平均 2.85, 増加した群が平均 2.96 であり, 群間で差はみられなかった。

考 察

本研究の対象は, 3 年課程の短期大学看護学科の 1 年生であるが, 年齢, 男女比から看護学生 1 年生として一般的な集団と考えられる。

演習後の自己効力感得点は, 演習前に比べ有意に高かった。つまり, 演習により学生の自己効力感が高まったと考えられる。演習は一般的に「物事に習熟するために練習を行うこと」「教師の指導のもとに実地に研究活動を行う授業」とされている¹¹⁾。看護教育における演習の定義は明確にされていないが¹²⁾, 野本は基礎看護技術の演習を, 「看護実践の状況を想定し, 教師の指導のもとに看護技術の練習を探求的に行う授業」ととらえ, 教員

Table 5 客観的評価と自己効力感の変化

	遂行行動達成得点
自己効力感減 (n=9)	3.00
自己効力感不変 (n=47)	2.85
自己効力感増 (n=24)	2.96

は看護実践の状況が想定でき, その中で看護技術を探求的に習得できるよう, 授業展開を工夫することが必要と述べている¹³⁾。血圧測定は, 最近のデジタル血圧計の普及などにより看護の知識をもたない一般の人でも自宅で簡単に測定できる身近なものである。今回の基礎看護技術演習では, リバロッチ水銀血圧計と聴診器を用い, 看護実践においてよくある場面を設定し, 血圧を測定した。学生は, 患者の苦痛を最小限にすることを常に考えながら, 器具の点検から始まり, 橈骨動脈での触診による最高血圧の予測, 上腕動脈の触診, 水銀柱を最高血圧の予測より 20mmHg まで上げ, 一拍動一目盛りで水銀柱を下げる操作等, いくつかの行動を積み重ね, 初めて正確な血圧を測定することができる。また, 学生はあらかじめ演習前に講義を受け, 血圧の示す意味や, 血圧測定に関する 1 つ 1 つの行動の意味を理解して演習に臨んでいる。看護職を目指す学生は, 演習の中で自分の目標に近づいていくことを実感したのではないだろうか。このように, より実践に近い状況の中で, 具体的に専門的な技術を習得することは看護学生の自己効力感を高めると考えられる。

今回, Bandura の概念に基づき, 自己効力感と自己効力を促進するという 3 つの情報との関連を明らかにした。自己効力感得点が演習後増加した者は, 変化のなかった者や減少した者より, 「遂行行動の達成」と「生理的情動的状態」の得点が高い傾向にあった。一方, 「言語的説得」は, 演習前後の自己効力感得点の変化と関連がみられなかった。つまり, 演習時の遂行行動の達成感や肯定的な感情は, 演習前に比べ演習後の, 自己効力感を高め, 言語的説得は, 演習後の自己効力感の変化にほとんど影響しないと考えられる。Bandura は, 自己効力感を促進する 4 つの情報に及ぼす影響について, 遂行行動の達成は自分自身の個人的経験に基づいていることから最も信頼できる原因になり, 言語的説得は, 手軽さ故に広く使用されるが, その影響は弱くすぐ消失してしまいがちで効果は弱いと述べている¹⁴⁾。坂野らは, 心拍数を増加するような課題を用いた実験研究において, 遂行行動の達成感を獲得すると自己効力感が上昇したと報告している¹⁵⁾。また, 岡田は, 中学生の発表場面の研究において, 遂行行動の達成は発表自己効力および発表不安の改善に対して

有効であることを明らかにした¹⁶⁾。一方、坂野らは、連続的失敗経験とそれに伴う嫌悪刺激による無力感を解消する実験研究で、言語的説得は自己効力感を高めるものにはならなかったと述べている¹⁷⁾。本研究の結果は、これらの研究結果と一致する。このことから、自己効力感を高めるには、他人による言語的な励ましより、学生自身が遂行行動の達成感を得られることが重要と考えられる。

教員による看護技術の客観的評価は、演習前後の自己効力感得点の変化と関連がみられなかった。Banduraは、自己効力感と知的能力が関連しないことをCollinsの研究を引用し述べている¹⁸⁾。Collinsの研究とは、子供たちを対象に算数の課題を与え、自己効力感と知的能力との関係をみたものである。Collinsによれば、子供たちの自己効力感が高いほど、算数の問題を解決しようとする態度が前向きで解決された問題が多く、一方、知的能力は学習に取り組む態度・意欲および学習成績とは無関係であったという。そして長期的な知的活動には、客観的に学習成績がよいことよりも、自己効力感が高いことが重要であると述べている。教員による看護技術の客観的評価をCollinsのいう学習成績ととらえると、本研究の結果はCollinsの研究結果と一致する。このことから、自己効力感とは教員のとらえる客観的な成績とは、あまり関係がないと考えられる。

基礎看護技術演習時の自己効力感を高めるには、遂行行動の達成感を学生自身が認識し、また肯定的な感情をもつことが重要であり、さらに教員による客観的評価より学生本人の主観的評価の方が重要であることが示唆された。近本は健康教育者トレーニングに関する指針¹⁹⁾の中で、自己効力感の概念を用いて健康教育の具体的指針を示した。この指針は、自己効力感を高めるために、将来的な目標の設定と同時に、比較的短期間に達成できる現実的目標を設定することが遂行行動の達成にとって重要性であること、また落ち着いて学べるような学習環境の整備や教育する側の不安や焦りというような情動をみせないことが情動の状態を良好にするために重要であることを報告している。このことから、看護教育においても、自己効力感を高めるため、学生が達成感を得やすい目標の設定が重要であり、適度に緊張感・充実感のある授業を行うことが重要であることが示唆された。ま

た、教員自身が、学生に対して常に安定した感情を保てるような人間性を高めることも重要であると考えられる。

演習前後の自己効力感得点の変化と、自己効力感を促進すると考えられる3つの情報との間に統計的に有意な差がみられなかった。これは、対象が80名とそれほど多くなく、演習前後の自己効力感得点の変化により3群に分けたところ、各群の人数にばらつきがあったことが一因と考えられる。本研究では、自己効力感の測定にSE尺度を用いた。本来自己効力感とは、ある特定の場面で遂行される特定の行動に対するものであるが、基礎看護技術演習時におけるSE尺度の妥当性は検証されていない。また、SE尺度は範囲が0～23点であるが、本研究の自己効力感得点は、演習前の平均が5.11点、演習後の平均が5.38点であった。今回は、本来5件法のところを2件法で測定したので他の研究と比較することが難しいため、この集団が標準的な自己効力感をもつのかどうか判断できない。今後5件法を用いて測定したり他の尺度を併用し、看護教育における信頼性、妥当性のある自己効力感尺度を検討する必要がある。

今後は、学生の自己効力感の継続的な変化を明らかにし、看護教育にとって自己効力感がどのような意味をもつのか、自己効力感を促進する情報をどのように組み合わせると最も学生の学習意欲が高まるのか、またそれぞれの情報を学生が認識するためには具体的にどのような方法があるのかなどについて検討し、より効果的な看護教育方法を開発していきたい。

文 献

- 1) 看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会：看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会中間報告書，1995
- 2) 保健婦助産婦看護婦養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について，1996
- 3) Bandura. A., 祐宗省三編：社会的学習理論の新展開，105，金子書房，1985
- 4) 前掲書 3)，109
- 5) 前掲書 3)，106-107
- 6) 前掲書 3)，109
- 7) 竹綱誠一郎，鎌原雅彦，沢崎俊之：自己効力感に関する研究の動向と問題，教育心理学研究，

- 36 (2), 172-184, 1988
- 8) 安酸史子:糖尿病患者と自己効力, 看護研究, 30 (6), 473-480, 1997
- 9) Nola J. Pender: Health promotion in nursing practice (third edition), 63-73, Appleton&Lange, 1996
- 10) 成田健一, 下仲順子 他4名:特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—, 教育心理学研究, 43 (3), 306-314, 1995
- 11) 新村出編:広辞苑 (第4版), 300, 岩波書店, 1991
- 12) 鈴木純恵, 太田澄恵, 永野光子:看護学教育の教育方法に関する研究動向と今後の課題2 演習・体験学習等に関する研究に焦点を当てて, 看護教育, 35 (11), 890-895, 1994
- 13) 野本百合子:基礎看護技術と看護の専門職性—演習における授業展開—, Quality Nursing 4 (3), 205-210, 1998
- 14) Bandura. A., 原野広太郎監訳:社会的学習理論, 90-92, 金子書房, 1979
- 15) 坂野雄二, 前田基成:虚偽の心拍フィードバックがセルフエフィカシーの変動と心拍コントロールに及ぼす効果, 千葉大学教育学部紀要, 35 (1), 23-32, 1987
- 16) 岡田勝彦:自己効力の変容が数学の発表場面における生徒の不安に及ぼす影響, 1996
- 17) 坂野雄二, 前田基成, 東條光彦:獲得された無力感の解消に及ぼす Self-Efficacy の効果, 行動療法研究, 13 (2), 43-53, 1988
- 18) 前掲書 3), 123-124
- 19) 近本洋介:健康学習者の自己効力感/健康教育者の自己効力感, 看護研究, 31 (1), 3-11, 1998
- 1998. 10. 30. 受稿, 1999. 1. 8. 受理—

要 約

看護学生1年生80名を対象に,基礎看護技術演習(血圧測定)前後の自己効力感の変化とその変化に影響する要因を, Bandura の概念を用いて明らかにした。自己効力感の測定には Sherer らの自己効力感尺度(SE尺度)を,自己効力感に影響する要因の測定には Bandura の概念をもとに作成した自己効力感促進尺度と,教員による客観的技術評価を用いた。

演習後の自己効力感得点は,演習前に比べ有意に増加した。また,自己効力感得点の増加には,「遂行行動の達成」「生理的情動的状态」が関連し,「言語的説得」と看護技術の客観的評価は関連していなかった。このことから,血圧測定という基本的な看護技術演習は看護学生の自己効力感を高めること,また学生自身が行動の達成感と肯定的な感情を抱くと自己効力感が高まることが推測された。

本研究の結果から,主体的な学習態度を養うための教育方法として,身近な学習目標の設定,学習環境の整備,学生自身の達成感への配慮,そして学生の肯定的な感情の促進などを重視しつつ授業を計画することの重要性が示唆された。

キーワード:自己効力感,看護教育,看護学生,基礎看護技術演習,血圧測定